

檜隈寺周辺の調査

—第176次

1 はじめに

本調査は、キトラ古墳周辺に計画された国営飛鳥歴史公園の整備にともなう発掘調査である。2008年度から実施しているもので、今年度はその5ヵ年目にあたる。今回の調査では、檜隈寺伽藍跡南方の、丘陵東裾（A区）と丘陵上（B区）の2ヵ所に調査区を設定した。A区は国土交通省の委託を受けたもので、昨年度おこなわれた第172次調査（A区：『紀要 2012』）において、素掘溝SD940を確認したため、その延長部分をあきらかにすべく調査範囲を設定した。B区は、第172次調査（B区：『紀要 2012』）において、幢竿支柱の遺構と考えた大型の柱穴2基（SX950）を確認したため、その西側延長部分で関連遺構の有無をあきらかにすべく調査範囲を設定した。調査期間は2012年8月1日～9月7日、調査面積は計140㎡である。

調査区一帯は、古代には渡来系氏族が多く居住した地域として知られ、なかでも檜隈寺は渡来系氏族である東漢氏の氏寺とされる。過去の調査においても、瓦積基壇やL字形カマドをもつ竪穴建物など、渡来系要素の強い遺構が確認されている。

檜隈寺に関しては、奈良文化財研究所がおこなった檜隈寺第1～4次調査で、金堂・講堂・西門・回廊といった主要堂塔を確認しており、伽藍主軸が北で23～24°西に振れることや、西を正面にすることなど、地形に制約された特異な伽藍配置をとることが判明している（『藤原概報 10～13』）。これらの建物の造営時期は出土遺物から、金堂・西門が7世紀後半、それにやや遅れて講堂・塔が7世紀末とされている。しかし、檜隈寺およびその周辺では7世紀前半の瓦が出土することから、前身寺院の存在が想定され、第159次調査（『紀要 2010』）で確認された南北溝SD870や竪穴建物SI910など、7世紀前半～中頃に遡る遺構も存在する。昨年度確認した幢竿支柱遺構は、塔の中軸延長線上に位置し、柱穴掘形から出土した遺物から見て、塔跡に現在も建つ十三重石塔（重要文化財「於美阿志神社石塔婆」）に関連した平安時代後期頃の遺構と推定される。

2 各調査区の概要

A 区

檜隈寺金堂南東方の丘陵東斜面において、第172次A区の北西側に調査区を設定した。調査面積は50㎡である。2面の棚田が位置する斜面地であるため、基本層序の深さは一定しないが、①表土（耕作土：20cm）、②棚田造成土（90cm）、③暗褐色粘質土（造成土：40cm）、地山の順である。ただし、丘陵裾側で一部、③と地山の間に石混じりの黄褐色粘質土（整地土）が確認できる。

検出した主な遺構は、T字形に接続する素掘溝2条である。

素掘溝SD940 調査区の中央で確認した素掘溝であり、北で西に32°の振れで、底面の標高にもとづくと南東から北西に流れていたとみられる。長さ7.0m分を確認し、溝の幅は2.0m、深さ85cmが残存していた。底面は幅1.5mで、平坦である。地山を掘り込んでおり、埋土の状況は地山が混じった暗褐色粘質土で、水が流れた痕跡は確認できない。また、石が混じるが、石組や貼石をうかがわせるほどではない。6世紀前半から7世紀前半までの土器や、格子タタキの瓦が出土した。

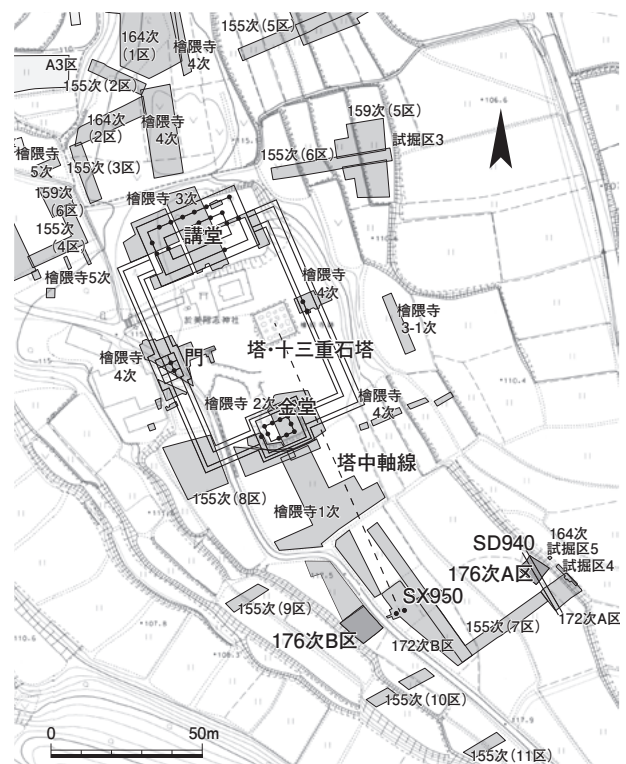


図166 第176次調査区位置図と主な遺構 1：2500

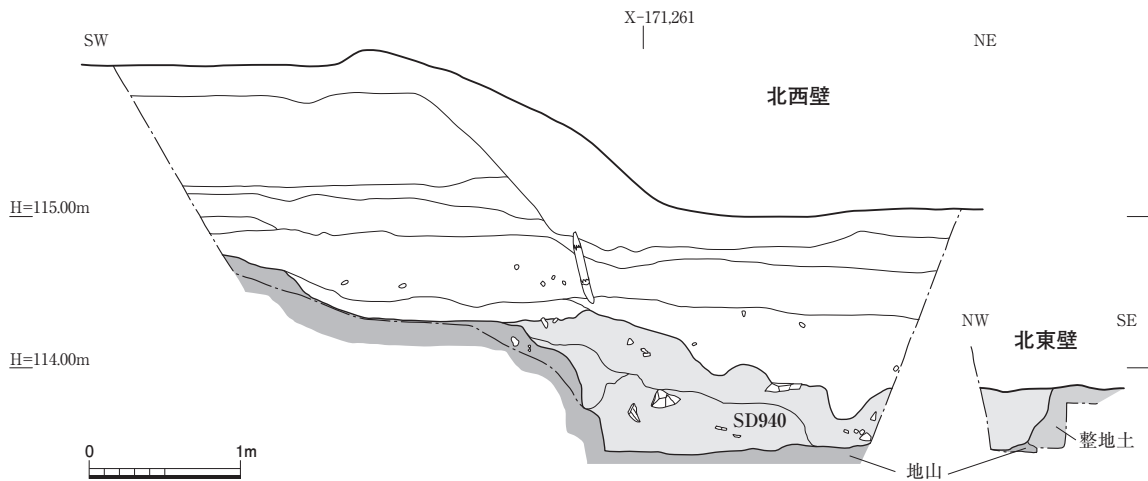


図167 A区SD940断面図 1:50

素掘溝SD943 調査区の東側で確認した素掘溝であり、北で東におよそ33°の振れで、素掘溝SD940に接続する南西端から、北東側の丘陵裾へ流れていたとみられる。長さ2.0m分を確認し、溝の幅は1.0m、深さ30cmが残存していた。地山を掘り込んでおり、埋土・流水痕跡・石などの状況はSD940と同様である。また、SD940の北西への流れが枝分かれするように、取付部東肩が削れている。したがって、埋土と取付部の状況から、SD940とこの溝は一連の溝で、同時に埋め立てられたものであるこ

とが判明する。

また、第172次調査では、このSD943と同様に、SD940から枝分かれする素掘溝SD941を検出していた。SD941は、長さ4m分を確認し、幅は0.9m、深さ約15cm、北で東におよそ33°の振れで、SD940との取付部もSD943と同様に削れている。SD943とは規模と振れもほぼ一致し、溝心々間距離で9.3mの位置関係にある。両者とも、溝底面の比高差から、SD940からあふれる水を排出する計画的な溝と考えられる。

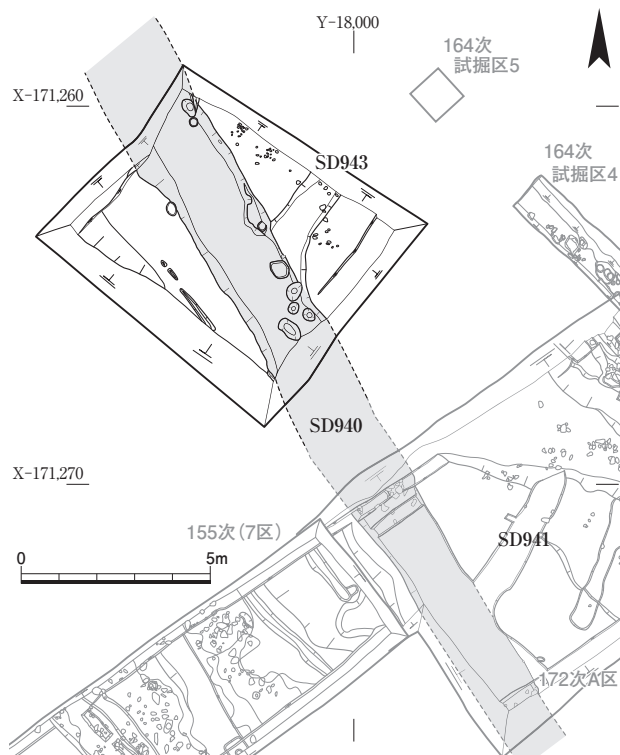


図168 第176次調査A区遺構図 1:200



図169 A区全景(南東から)

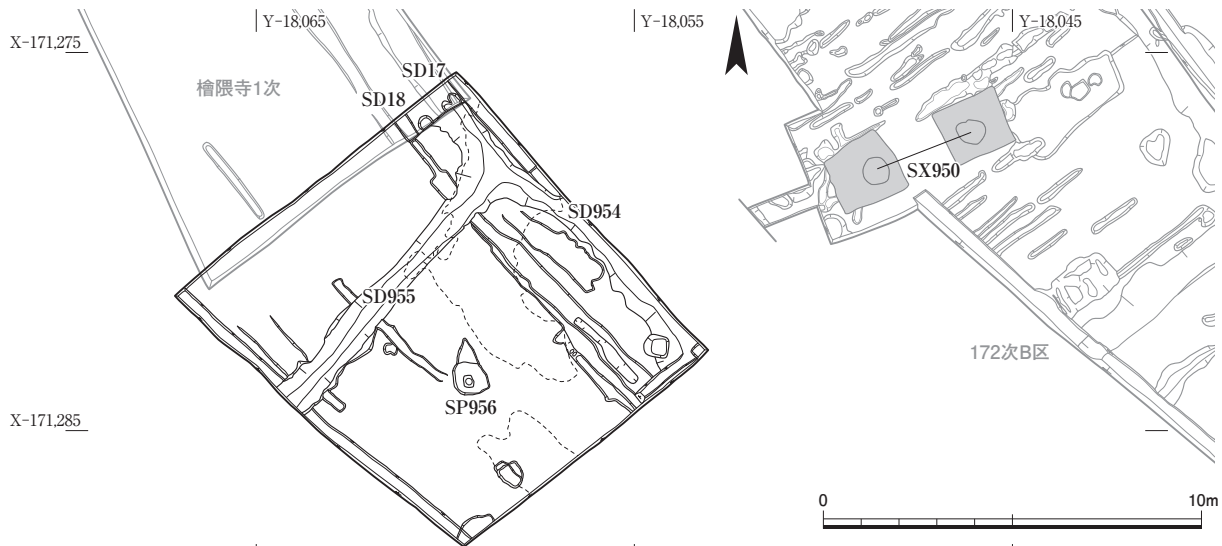


図170 第176次調査B区遺構図 1:200

B 区

檜隈寺金堂南東方の丘陵上において、第172次調査B区の西側で、檜隈寺第1次調査区（『藤原概報 10』）を北側に繋げる形で調査区を設定した。調査区は旧水田耕作地の平坦部分である。調査区内のほとんどで表土（耕作土：35cm）を除去すると地山が露出する。調査面積は90㎡。

検出した主な遺構は素掘溝で、ほかに柱穴や近代の耕作溝、小穴などを検出した。素掘溝は、檜隈寺第1次調査で確認していたSD17に連なるSD954・955でY字状に合流する。そのうち素掘溝SD954は調査区外へ延びるため詳細は不明である。柱穴SP956は柱痕跡が確認できたが、ごく浅く残存し、1基のみ独立している。



図171 B区全景（南東から）

素掘溝SD955 調査区中央で検出した素掘溝で、長さ8m分を確認した。底部の標高にもとづくと、合流地点の北東から南西方向の丘陵裾に向かって流れていたとみられる。溝の幅は0.9m、深さ45cmで、薬研状（断面V字状）に掘られている。出土遺物は土器・瓦のいずれも細片にとどまり、時期を推定する材料は得られなかった。

この溝に連なるSD17について、檜隈寺第1次調査では耕作溝と見ていたが、SD954・955を含めて、これらは重複する耕作溝の中で最も古い溝であり、幅・深さともに規模が大きく、埋土の状況も異なる。その一方で、第172次調査で検出した平安時代の大型柱穴SX950に比べると、埋土の状況や含まれる遺物から見て、古代まで遺構の時期が遡るようには見えない。そこで、ここでは中近世頃の遺構と見ておくこととする。（黒坂貴裕）

3 出土遺物

土器 整理用木箱3箱分あり、土師器・須恵器・陶器などが出土している。遺構にともなって出土した土器の時期は、6・7世紀代を中心とする。ここではA区の素掘溝SD940から出土した土器を報告する。

土師器（1～5）は、いずれも小片であり、器面全体が磨滅しているため、調整痕が観察しにくい。時期は、7世紀代にあたとみられる。1～4は杯H。1は、外面がやや丸みをもち、口縁端部は丸く収まる。2は、底部がヘラケズリによる調整で器壁を薄くする。5は甕。口縁端部が丸く収まり、口縁部から頸部の器壁を厚くす

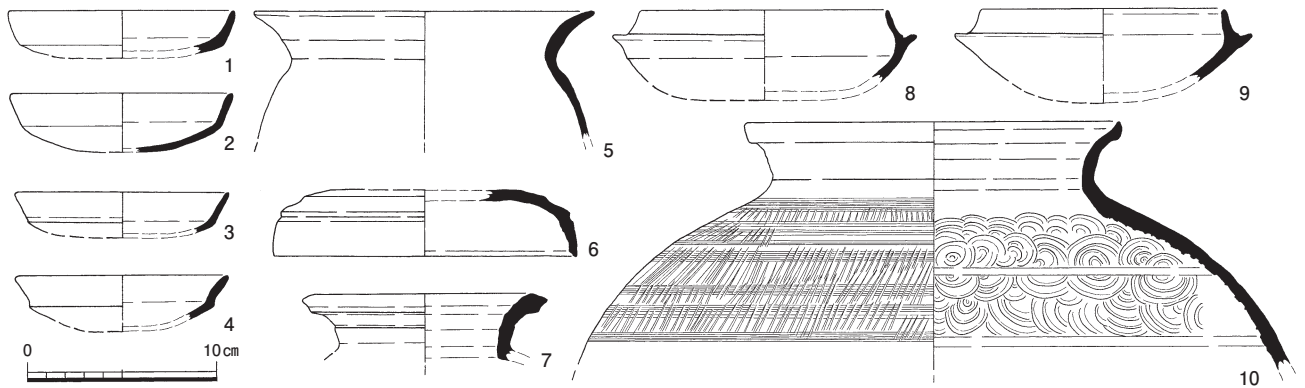


図172 第176次調査出土土器 1:4

る。胎土には、白色の粒を多量に含む。須恵器（6～10）は、全形を復元できる資料が少ないものの、帰属時期は6世紀代を中心とする。6は、杯Hの蓋。頂部ロクロケズリ調整。MT15型式。7は壺の口頸部。外面はロクロナデ、内面は頸部と胴部の接続部分をユビオサエした後ロクロナデを施し、タタキ調整している。8・9は、杯H。8は、口縁部の器壁が薄く、立ち上がりやや高くなる。受け部と口縁部の接続部分に浅い溝がめぐる。TK10～MT85型式。9は、口縁部の器壁が厚く、立ち上がりやや高くなる。口縁端部は、内傾する面をもつ。TK10～MT85型式。10は甕。外面はタタキ後にカキメを施し、内面は同心円文の当て具痕の上にヨコナデを施す。MT15型式。

（荒田敬介）

瓦類・その他 瓦類は丸瓦15点（1.73kg）、平瓦105点（10.76kg）、以上は古代の瓦で、他に中近世の平瓦3点（0.1kg）が出土した。古代の瓦のうち、15点（2.07kg）が格子タタキであり、A区から12点、B区から3点が出土した。A区の素掘溝SD940からは、19点（2.06kg）の瓦が出土したが、そのうち6点（0.96kg）が格子タタキであった。

その他に、燃えさし1点、炭1点、骨片（歯）1点が出土した。

5 まとめ

今回の調査の目的と、それに対応する成果は大きく以下の2点にまとめられる。

第一に、A区では昨年度確認していた素掘溝SD940の規模と性格をあきらかにすることを目的とした。

調査の結果、昨年度（第172次調査）の成果とあわせて、SD940は総延長18m分が丘陵の地形に沿って真っ直ぐ延びることを確認した。また、遺構の標高が低い側での調

査であったため、本来の規模に近い状況を確認できた。その規模は幅2.0m、深さ85cmというもので、生活・耕作関連の遺構とは考えることができない。つまり、この地点での検出を考慮するならば、SD940は檜隈寺に関連すると考えるのが妥当であり、地形を考えると丘陵に沿って寺域を区画する性格を持つ可能性もある。また、SD940の出土遺物では、6世紀前半から7世紀前半までの土器と、格子タタキの瓦の出土が特徴的である。これらを勘案すると、SD940は檜隈寺関連遺構の中でも、これまでたびたび指摘・想定されてきた檜隈寺（7世紀末整備）の前身寺院に関わる遺構であると考えられる。

今回の調査区より北側は、水田耕作にともなう造成などで遺構が削平されていると見られるが、南側は遺構が残る可能性が高い。この南側の延長部分の調査によって、前身寺院の実態をあきらかにする手がかりが得られるものと考えられる。

第二に、B区では昨年度確認して幢竿支柱の遺構と考えた大型柱穴2基（SX950）の、西側の状況を確認することを目的とした。SX950に対応して檜隈寺金堂の中軸延長線の対称位置に幢竿支柱遺構が存在しないか、あるいはSX950に連なる区画遺構が存在しないか、主に以上の点についてあきらかにすることとした。

調査の結果、調査区内に古代の遺構を確認することはできなかった。削平が大きいことも推測できたが、標高から見てSX950と同様の遺構であれば、柱穴が残存するはずであるため、少なくとも幢竿支柱遺構は存在しなかったことが判明した。したがって、この調査区周辺では塔（十三重石塔）に中軸線を揃えた幢竿が1基立っていたということになる。

（黒坂）